論　文

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における関ヶ原の戦い関連の記載についての考察（その2）

－関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況－

白　峰　　旬

【要　　旨】

これまで関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況については、日本国内の史料（日本側の史料）により検討されてきたが、イエズス会宣教師が当該期の日本国内の政治状況などを報じた『十六・七世紀イエズス会日本報告集』には、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況などが詳しく記されているので、本稿では『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の記載内容の検討をもとに、関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況について考察する。

【キーワード】

イエズス会、関ヶ原の戦い、石田三成、徳川家康、豊臣秀頼

※拙稿「『十六･七世紀イエズス会日本報告集』における関ヶ原の戦い関連の記載についての考察（その１）－関ヶ原の戦いに至る政治状況と関ヶ原の戦い当日の実戦の状況－」（『別府大学大学院紀要』17号、別府大学会、2015年）より続く。

６．関ヶ原の戦い（慶長５年）

石田三成・毛利輝元方と家康方の両軍事勢力が軍事的に衝突する場所は、最初から関ヶ原と決められていたわけではない。「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、福島正則について「この君侯（引用者注：福島正則）は内府様（ダイフサマ）側（引用者注：家康側）の人であるから、その領内でもっとも戦さが激しくなるに違いなかった」（Ⅰ－３、235頁）と記されていて、福島正則が家康方であるため、その領国である尾張国内での激戦が予想されていた。

宣教師が美濃国内にいた時の織田秀信の動向について、「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料８〕（Ⅰ－３、238頁）

a我らがかの地にいた過ぐる日に、b彼（中納言殿）が（太閤様の）若君（ブリンシベ）・秀頼様（ヒデヨリサマ）に味方することを宣言すると、ただちに（若君）から（中納言殿のところへ）米二千ないし三千石（ゴク） ― 米二俵が一石である ― がもたらされ、彼が（若君に）、c美濃国全領を授けられたことの感謝の意を表すために訪ねて行くと、d秀頼様は、彼の父君が有していた四万（ママ）（引用者注：四十万ヵ）クルザードに相当する美濃と尾張のすべての扶持を与え、さらにおよそ一万（クルザード）にも達する金の延板（ベラ）二百枚を授けた。（下線引用者）

下線aの宣教師が美濃国内にいた時期を考えるうえで参考になるのは、下線bの織田秀信が豊臣秀頼に味方することを宣言した、という記載である。つまり、織田秀信が豊臣秀頼に味方することを宣言したということは、この時点では、「内府ちかひの条々」が出されて家康が豊臣公儀から排除されていることを示している。「内府ちかひの条々」が出されたのは７月17日であるから、それ以降の時期であることは明らかである。

下線bについては、①織田秀信が豊臣秀頼に味方すると記載されている、②豊臣秀頼について「若君」と記載されている、③豊臣秀頼について「秀頼様」と記載され様付になっている、という点で重要である。①は織田秀信が石田三成や毛利輝元に味方するのではなく、豊臣秀頼に味方すると記されているので、家康方の軍勢と対戦する軍勢のトップは秀頼であることがわかる。また、②は、秀頼＝「若君」であり、「若君」とは「幼い主君」[22]という意味なので、秀頼は諸大名から見て「幼い主君」であったことがわかる。そのため、③で指摘したように秀頼は様付になっているのであろう。ちなみに、豊臣秀頼は慶長５年の時点で８歳であった。

下線cについては、それまで織田秀信は「美濃の国の大半を有し」（Ⅰ－３、235頁）ていたが（つまり、美濃国内には織田秀信以外にも中小の領主がいた）、秀頼に味方したことにより「美濃国全領」が織田秀信に与えられたことがわかる。このことは、この時点で、秀頼が知行宛行権を行使したという意味で重要である。

そして、下線dにあるように、秀頼が織田秀信に対して「美濃と尾張のすべての扶持を与え」としていることから、この記載について、秀頼が織田秀信に対して美濃国と尾張国を与えた、と解釈すると、尾張国は福島正則の領国であったので（ただし、尾張国内には黒田城主一柳直盛、犬山城主石川貞清もいた）、福島正則は秀頼から改易にされた、ということを意味する。ちなみに、後述のように3500クルザードは5000石に相当する（Ⅰ－３、231頁）。よって、この基準をもとに計算すると、秀頼が織田秀信に与えた４万クルザードは５万7143石に相当するので（計算上、小数点第一位を四捨五入した）、「美濃と尾張のすべての扶持」という点を勘案すると、「四万クルザード」は「四十万クルザード」（57万1430石に相当する）の誤記の可能性が高い。

石田三成方の軍勢の動きは、宣教師が、「（石田）治部少輔（三成）の軍勢と遭遇の折」（Ⅰ－３、239～240頁）と記されているほか、「別の地で私が出会った宰相殿の（中略）彼らはそこでおよそ一万二千人くらいが城塞を修復し、出陣の準備をしていた」（Ⅰ－３、240頁）と記されている。こ

のことから、宣教師は石田三成の軍勢と遭遇し、別の場所で毛利秀元（「宰相殿」）の軍勢とも行き合ったことがわかる。この宣教師は、美濃国内にいたか、或いは、美濃国から移動中だった可能性が高く、時期としては、石田三成方の軍勢が家康方軍勢と直接対戦する前の時期であることは明らかなので８月上旬～中旬頃と考えられる。なお、毛利秀元の軍勢が「およそ一万二千人くらい」という点は、当時の日本側の史料である石田三成の人数書立て[23]（8月5日頃の時点における石田・毛利方の諸将の配置と動員人数を記した史料）では毛利秀就（ママ）（秀元ヵ）の軍勢の人数を１万人としていて数字的には近似しているので、「およそ一万二千人くらい」という記載は信憑性が高いことを示している。そして、毛利秀元の軍勢およそ１万2000人くらいが修復していた城塞というのは、その人数からすると大規模な修復になるので、松尾山城の可能性も考えられる。

石田三成・毛利輝元方の軍勢の動向について、「1600年度日本年報補遺」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、次のように記されている。

〔史料９〕（Ⅰ－３、306～307頁）

彼（引用者注：家康）は己が領国である関東に留まって、奉行の一人であった（上杉）景勝と戦さをしていた。奉行側に味方していた者たちは、ａ都（ミヤコ）へ通じるすべての街道を封鎖することを考え、こうすることによって軍勢を率いて都へ帰ろうとする敵の望みを奪おうとした。ｂ彼らはこの計画を実行するために、伊勢と美濃の国に己が最大の軍勢を集結させた。美濃の国は尾張の国に接していたが、ｃそこ（引用者注：尾張国）には日本国全土でもっとも立派な城郭の一つがあり、彼らはその領国（引用者注：尾張国）を掌中に収める目的であった。（中略）またｄ（石田）治部少輔が六、七千の軍勢を率いて、同国（引用者注：美濃国）の中に毎時大勢を待機させておいて、伊勢と美濃の国からはいれる尾張のその地域へ侵入できるようにしていた（後略）（下線引用者）

石田三成・毛利輝元方では、都へ通じるすべての街道を封鎖して、家康方の軍勢が都へ来ることを阻止しようとし（下線ａ）、そのため伊勢国・美濃国に最大規模の軍勢を集結させた（下線ｂ）。このように、石田・毛利方が伊勢国・美濃国に軍勢を集結させて街道を封鎖しようとしたのは、家康に従って上杉討伐のために東下した諸大名の軍勢が西上してくることを想定して、その西上を阻止しようとしたことを示している。つまり、石田・毛利方では西上してくる家康方の軍勢との対戦が最も重要と認識していたのであろう。

下線ｃにおける「日本国全土でもっとも立派な城郭の一つ」とは、福島正則の居城である清須城（尾張）を指すと考えられ、石田・毛利方では清須城の奪取を狙っていたことがわかる。この点は上述したように、尾張国内での激戦が予想されていたこととも符合する。

下線ｄは、石田三成が6000～7000の軍勢を率いて美濃国内に待機し、隣国の尾張国内への侵攻を狙っていた、としている。この場合、石田三成の軍勢が6000～7000という点は、上述した石田三成の人数書立て[24]において石田三成の軍勢の人数を6700人としている点と近似する。

その後、家康方の軍勢により岐阜城攻城戦があり、家康方が勝利して、岐阜城主の織田秀信は「つ

いに敵に降参し、敵から尾張の城（引用者注：清須城ヵ）へ送還された」（Ⅰ－3、308頁）。

そして、「このような状況下で、薩摩の国主（島津義弘）と（小西）アゴスチイノ摂津守殿が若干の軍勢を率いて（石田）治部少輔の城（引用者注：大垣城）へ到着した」（Ⅰ－3、308頁）。この場合、大垣城に入城した島津義弘と小西行長の軍勢が「若干の軍勢」であり、兵力数としてそれ程多くなかった点に注意したい。

9月15日当日の関ヶ原の戦い（本戦）に関して、「1600年度日本年報補遺」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には次のように記されている。

〔史料10〕（Ⅰ－3、309～310頁）

a多くの地に分散した軍勢を擁していた奉行たちは軍勢を美濃の国へ集結させる意図を少しも棄てず、それを実行した。そこで八万人を集結したが、その力をもってすれば、内府様側についてそれらの地にいたすべての軍勢が、短時間で殲滅し根絶されうるものであった。bしかし、奉行たちの相互間の意見の一致はいとも乏しく、全三十日の間に、三万にも満たぬ敵の軍勢に対して、たった一度さえ攻撃をかけなかったほどである。（中略）内府様は時間が無駄に過ぎぬよう、尾張へ到着したその日に、c美濃（ママ）（引用者注：尾張ヵ）にいた軍勢と合流し、そのうえ五万の軍勢を擁するようにした。

翌日彼（引用者注：家康）はd敵と戦闘を開始したが、始まったと思う間もなく、これまで奉行たちの味方と考えられていた何人かが内府様の軍勢の方へ移っていった。彼らの中には、太閤様の奥方の甥であり、太閤様から筑前の国をもらっていた（小早川）中納言（金吾秀秋）がいた。同様にたいして勢力ある者ではなかったが、他の三名の諸侯が奉行たちの軍勢に対して武器を向けた。 e奉行たちの軍勢の中には、間もなく裏切行為のため叫喚が起こり、陣列の混乱が叫喚に続いた。 f同じく毛利（輝元（ママ））殿〔彼は九ヵ国の国主であった〕の軍勢は、合戦場から戦うことなしに退却した。

gこうして短時間のうちに奉行たちの軍勢は打倒され、内府様は勝利をおさめた。（下線引用者）

石田三成・毛利輝元方では、それまで分散していた軍勢を美濃国に集結させて兵力数が8万人になり、家康方の軍勢を「短時間で殲滅し根絶」できる（下線a）ほど優勢であったが、指揮命令をおこなう複数のトップ（二大老、四奉行）の間で「相互間の意見の一致」が少なかったため、迅速な指揮命令ができず、「全三十日の間」（8月中を指すと考えられる）に3万未満の家康方軍勢（この時点では家康は到着して合流していない）に対して、一度も攻撃をかけなかった（下線b）。

その後、家康が到着し合流して家康方の軍勢が5万になった（下線c）としているので、家康が江戸から引き連れて来た軍勢は2万だったことになる。

9月15日当日の戦況は、開戦と同時に小早川秀秋と他の3名の大名が裏切って家康方についたため（下線d）、石田三成方の軍勢はパニックに陥り、陣列が混乱して（下線e）、短時間で敗北した（下線g）。

なお、下線ｆにおける「毛利殿」について、訳者（家入敏光氏訳）は毛利輝元に比定しているが、南宮山に布陣した毛利秀元のことを指していると考えるのが正しいので毛利秀元に比定すべきである。

上記の〔史料10〕の記載において、特に注目されるのが、開戦と同時に小早川秀秋などが裏切って家康方についた（下線ｄ）、としている点である。これまでの通説では、小早川秀秋の裏切りについて、当日（15日）の正午頃までは秀秋は去就をあきらかにしておらず、石田三成方を裏切って大谷吉継隊を攻撃したのは正午頃としているが[25]、この点については大きく修正が必要になる。

そして、開戦と同時に小早川秀秋などが裏切ったことにより（下線d）、石田三成方の軍勢は開戦してから短時間で敗北した（下線g）ことがわかる。この点については、他の箇所の同様の記載として、「わずかの間に諸奉行の軍は総崩れとなり」（下線引用者）、（Ｉ－３、254頁）、「仕組まれた裏切りのため一瞬にして全軍が敗れると」（下線引用者）、（Ｉ－３、278頁）、「奉行側の軍勢は我らが先述したように、非道なる裏切者たちの悪業によってごく短時日で敗北してしまった」（下線引用者）、（Ｉ－３、349頁）と記されていて、石田三成方の軍勢は瞬時に敗北したことがわかる。

下線ｂに関連して、石田・毛利方が迅速な指揮命令ができなかった点に関連して「この戦闘の全期間に、内府様の軍勢は己が指揮者の命令を遂行するに際しては最大の迅速さを示した。つまり全軍は、一人の人間（引用者注：家康）の意志に従っていたからである。これに反して敵方（引用者注：石田・毛利方）では、多数の人々によって指揮されていたので、遅延と緩慢以外の何ものもなかった。なぜなら奉行たちは熟考し、そして互いに多くのことを議論している間に事態に善処すべき機会が両手から逃げてしまったからである。」（下線引用者）、（Ｉ－３、307頁）というように同様の記載もあり、宣教師側の史料が、このようにマクロな意味での石田・毛利方の敗因分析をしていることは、日本側の史料には見えない点であり注目される。この中で、石田・毛利方は「多数の人々によって指揮されていた」としている点は、石田三成一人が指揮していたわけではなかったことを示しており、石田・毛利方の軍事指揮のあり方を考えるうえで重要である。

関ヶ原の戦い後、大坂城西の丸に在城していた毛利輝元の動向について、「1600年度日本年報補遺」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には次のように記されている。

〔史料11〕（Ｉ－３、311頁）

内府様は軍勢を率いて大坂城へ進軍した。城（引用者注：大坂城西の丸）には毛利（輝元）殿が住んでいた。（中略）ａこの当時毛利（輝元）殿は（中略）太閤様の財宝と息子（引用者注：豊臣秀頼）をも己が権限の下に置き、そしてすべての諸侯の人質、内府様に味方していた人々の人質に対してさえも権限をもっていたが、このほかにｂ己が諸領国から四万の軍勢をも召集していた。ｃ最後に彼は幾年にも及ぶ戦争に必要な食糧その他の必要物質（ママ）（引用者注：物資ヵ）を豊富に蓄積してあったにも拘わらず、ｄ味方の軍勢が内府様によって打ち破られたと知るやいなや、非常な驚怖に呆然となり、そしてまったく恐れおののいてしまい、ｅ戦さと戦闘を交えることも、また敵の勢力を撃退することさえ考えなかった。また驚くべきことは、ｆ彼は自

国へ帰ることが容易にできたのにそれもせず、またｇ敵方に対して和平の諸条件を一つも提示せず、（中略）ｈすべての側近者といっしょに大坂城を出て城外にある荘麗に建てられた自らの別荘に身を隠し、ｉそこで敵の思うとおりに降伏することを考えた。

ｊこうして内府様は失っていた大坂城をやすやすと掌中に取り戻し、それから日ならずして、ほとんど日本国全土の支配権を得た。（下線引用者）

関ヶ原の戦い後、大坂城に在城していた毛利輝元は、①豊臣秀吉の後継者である秀頼を推戴し（かつコントロール下に置いて）、豊臣家の財産（家産）を管理していた（下線ａ）、②自分の領国から４万の軍勢を上坂させていた（下線ｂ）[26]、③大坂城に数年は籠城できる兵糧その他の物資が備えられていた（下線ｃ）、というように大坂城に在城して家康方の軍勢と十分に戦うことができる状態であった。

しかし、毛利輝元は、関ヶ原の戦いで石田三成方の軍勢が家康方の軍勢に敗北したことを知ると、すぐに驚き恐れて呆然となり（下線ｄ）、家康方の軍勢と戦うことを全く考えずに（下線ｅ）、自分の領国に帰ることもしなかった（下線ｆ）。そして、家康方に対して和平条件を提示することすらせずに（下線ｇ）、大坂城から退去したのである（下線ｈ）。

このように毛利輝元は、関ヶ原の戦いの敗報を受けた後は、全く戦意喪失して、自分が掌握していた有利な条件をすべて無駄に投げ捨てて大坂城を出たのであり、こうした無能な態度が、家康の思う壺になる形で降伏することになった（下線ｉ）。

この結果、家康はたやすく大坂城を取り戻すことができ、その後、「ほとんど日本国全土の支配権」を得ることになった（下線ｊ）。

それでは、なぜ毛利輝元は関ヶ原の戦いの敗報を聞いただけで、このように自らの無能さをさらけだすような形で無様（ぶざま）に降参したのであろうか。それまで毛利輝元は秀頼を推戴して石田三成と共に政権（石田・毛利連合政権[27]）を形成していたので、政権そのものを投げ出したということになる。

その理由としては、関ヶ原の敗戦によって、石田三成と安国寺恵瓊を失ったことが大きいと考えられる。安国寺恵瓊は「仏僧で、九ヵ国の国主毛利（輝元）殿が父のように敬愛し、その助言によってすべてを治めており、反内府様同盟の張本人であった」（Ⅰ－３、280頁）と記されている。よって、関ヶ原の戦いに至る反家康同盟の首謀者であった安国寺恵瓊は、毛利輝元に対する影響力が大きく、輝元を関ヶ原の戦いに引き込んだ人物であった。安国寺恵瓊については「毛利殿（引用者注：毛利輝元）は常に傍に置き、父のように敬っている」（Ⅰ－３、206頁）、「彼（引用者注：安国寺恵瓊）は自分が欲することは何でも毛利殿（引用者注：毛利輝元）にやらせていた」（Ⅰ－３、206頁）と記されているので、毛利輝元が安国寺恵瓊をいかに信頼していたか、また、安国寺恵瓊の毛利輝元に対する影響力の大きさを知ることができる。ちなみに、関ヶ原の戦いがあった慶長５年の時点で毛利輝元は48歳、安国寺恵瓊は61歳または64歳であった（安国寺恵瓊の生年については天文６年〔1537〕と天文８年〔1539〕の２説がある）。

石田三成については、安国寺恵瓊、小西行長とともに「盟約（引用者注：反家康同盟）の重立っ

た指揮者であった三名」（Ⅰ－３、332頁）のうちの一人であった[28]。三成は「同盟軍（引用者注：反家康同盟軍）の首謀者かつ頭首」（Ⅰ－３、351頁）として、反家康の急先鋒であったので、毛利輝元が反家康の政治的・軍事的主導者であった安国寺恵瓊と石田三成を同時に失ったことは、相当なダメージであり、輝元一人では大坂城に籠城して反家康の軍事行動をとることもできず、秀頼を推戴して政権の運営を継続させることも不可能であった。このことが、輝元が茫然自失になって大坂城から退城した理由と考えられる。つまり、輝元を反家康の盟主に担ぎ上げた安国寺恵瓊と石田三成を失った時点で、担ぎ手（安国寺恵瓊、石田三成）がいなくなって御輿（毛利輝元）だけの状態になったようなもので、輝元自身には政治的・軍事的にその後の具体的方向性が見えてこなかったのであろう。

７．９月15日当日における明石掃部の奮戦と実戦の状況

明石掃部（かもん）（全登）は宇喜多秀家の重臣であり、キリシタンとして著名である。明石掃部について「1595年２月14日付オルガンティーノのイエズス会総長宛書簡」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には「三ヵ国、すなわち備前、美作（ミマサカ）、備中の国主なる（宇喜多）備前宰相（八郎）殿の甥にあたり、（小西）アゴスチイノ（行長）の非常な親友」（Ⅰ－２、28頁）、「1596年度年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には「三ヵ国の国主である備前宰相（宇喜多秀家）の甥である（明石）掃部殿（カモン）」（Ⅰ－２、268頁）、「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には「中納言（引用者注:宇喜多秀家）の義兄弟である明石掃部殿」（Ⅰ－３、230頁）、「備前の国主（宇喜多秀家）の姉妹と結婚した義兄弟の明石掃部ドン・ジョアン」（Ⅰ－３、258頁）、「国主備前中納言（宇喜多秀家）の義兄弟で（甲斐守〔引用者注:黒田長政〕）の親友」（Ⅰ－３、289頁）、と記されている。

こうした記載から、明石掃部は宇喜多秀家の甥にあたり[29]、後に秀家の姉妹と結婚したため秀家の義兄弟になったことがわかる。交友関係では、小西行長とは「非常な親友」であり、黒田長政とも「親友」の関係にあった。

明石掃部については、「1596年度年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には「太閤の大坂での建築工事のすべてを監督している（明石）掃部殿（カモン）」（Ⅰ－２、230頁）と記されていて、秀吉の時代の大坂での「建築工事」（大坂城普請か？）の奉行（「監督」）をしていたことがわかる。この場合、大坂での「建築工事」が、秀吉の大坂城普請を指しているとすれば、その公儀普請奉行であったか、或いは、宇喜多家の普請奉行であった可能性が高い。また、「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には「（明石）ドン・ジョアン（掃部）は世人からすこぶる賢明かつ勇敢な武士であると見なされ、万事につけて傑出していた。そして国主（引用者注：宇喜多秀家）の義兄弟で、同国（引用者注：宇喜多秀家の領国である備前・美作・備中）の重立った奉行であり、かつ毎年三千五百クルザードに相当する五千石（ゴク）の収入を得ているので、大きい屋敷と

多数の家臣を有している。」（Ⅰ－3、231頁）と記されていて、宇喜多秀家麾下の主要な奉行を務め、知行高は5000石であったことがわかる。このように、明石掃部は宇喜多秀家の重臣として活躍していたが、関ヶ原の戦いで実際に戦った状況について、「1600年度日本年報補遺」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には次のように記されている。

〔史料12〕（Ⅰ－3、335～336頁）

明石掃部は敏捷で軍略に非常に巧みな者として、a日本の奉行側の軍（引用者注：石田三成方の軍勢）の第一線で戦っていた人々の指揮者とされたが、b合戦の開始にあたり裏切り者の軍勢（引用者注：小早川秀秋などの軍勢）によって置き去りにされたため、自分は敵方の軍勢（引用者注：家康方の軍勢）に取り囲まれているのに気づいた。c逃げられる希望はまったくなかったので、彼は敵方の兵の手にかかって命を失うよりは先に合戦をやめてはならぬと決意して敵軍の真ん中へ突入した。d彼は自決するという日本人たちの風習が不敬かつ邪悪であることを正しく知っていたので、切腹という考えを、デウスの助けによって退けた後、eあらゆる努力をもってただもっとも密集した敵軍の真っ只中で戦いながら、敵の手にかかって殺されようとした。彼はこの決意をもって徒歩のまま一心不乱に戦っていた時、f内府様側についていた己が友人の甲斐守（引用者注：黒田長政）に出会った。g彼（引用者注：明石掃部）は着ていた衣服と武具によって、ただちに見分けられ、友人としての挨拶を受け、生命のことは構わずに勇気を振るうよう鼓舞された。その時甲斐守はこう言った。どうして明石掃部が、h敵たちが射つ（ママ）（引用者注：撃つヵ）弾丸の雨の中で無事でおれるのか自分はまったく驚かずにはおれぬ。あるいは少なくともこの種の危険にあることが判っていれば、国の風習に従って自決すべきではなかろうか、と。すると明石掃部はこう答えた。自分はデウスに対する畏敬の念から、そのような犯罪行為を非常に恐れた。自分がわざともっとも密集した軍勢の中へ突入したのは、勇ましい軍兵たちの中で戦って敵の手にかかって討死しようとしたのである。もし甲斐守自身の手によって、首級が刎ねられるとしたら並々ならぬ恩義を感じるであろう、と。すると甲斐守は、こう言った。自分はそのような行為には関わりたくない、と。それのみならず（甲斐守）は、i彼の助命について内府様（ダイフサマ）と非常に熱心に話し合おうと引き受けた。jそして（甲斐守）は馬から下りると、明石掃部（アカシカモン）がそれを使うことを望み自分は従臣の馬に乗った。

勝利を得て後、甲斐守は誠実さを守った。なぜなら彼は内府様に嘆願して、こう願ったからである。k明石掃部を助命して、彼を自分の家臣に入れることを許して欲しい、と。内府様は二つの願いを快く容易に許しただけでなく、明石掃部のような非常にすばらしくて栄誉ある人物が、国家のために生き残っていることを知って喜んでいるように思われた。（中略）

lその後明石掃部は大坂を訪れて、そこで我らの同僚たちから二、三日歓待された。（下線引用者）

関ヶ原の戦場で、明石掃部は、石田三成方の軍勢の最前線で「指揮者」として戦ったが（下線a）、開戦と同時に裏切った軍勢（小早川秀秋などの軍勢）によって戦場に置き去りにされたため、敵で

ある家康方の軍勢に包囲された（下線ｂ）。この記載からは、小早川秀秋などの軍勢が開戦と同時に裏切ったが、そのことを明石掃部は事前には全く知らなかったことがわかる。そのために明石掃部は戦場に置き去りにされたのであろう。明石掃部は宇喜多秀家の重臣であったので、宇喜多隊に属して戦ったと考えられるが、開戦と同時に置き去りにされたということは、小早川秀秋などの裏切った軍勢にかなり近い位置にいたのか、或いは、予期しなかった小早川秀秋などの裏切りによって宇喜多隊はかなり早い段階（開戦と同時の段階であった可能性が高い）で戦線が崩壊して軍勢がバラバラになった、と考えられる。

そして、こうした状況下、明石掃部は退路を塞がれたため、このまま敵兵にみすみす殺されてはならないと思い、敵兵（家康方の軍勢）の真ん中へ突進した（下線ｃ）。明石掃部はキリシタンであったため切腹はせずに（下線ｄ）、「もっとも密集した敵軍の真っ只中」で徒歩で戦っていた時（下線ｅ）、友人ではあったが、敵である家康方の黒田長政に出会った（下線ｆ）。明石掃部は「着ていた衣服と武具」によって、黒田長政からすぐに明石掃部であると見分けられ、「友人としての挨拶」をされて勇気を振るうように励まされた（下線ｇ）。

この時の戦場の状況は、家康方の軍勢から撃たれる火縄銃の「弾丸の雨の中」のような状態であり、火縄銃が多用されたことがわかる。その後、黒田長政は明石掃部の助命を家康に頼むことにして（下線ｉ）、長政は馬から降りて明石掃部に譲り、自分は家臣の馬に乗った（下線ｌ）。このこと（黒田長政が自分の馬を明石掃部に譲ったこと）からすると、明石掃部はこの時は徒歩で戦っていたが、本来は馬に乗って戦っていたと考えられ、黒田長政も馬に乗って戦っていたことがわかるので、両者ともに戦闘中は馬に乗って戦ったことは明らかである。この点は、合戦の戦闘中に大名（黒田長政）クラスや大名の重臣（明石掃部）クラスの者が馬に乗って戦ったのかどうか、という問題を考えるうえで、馬に乗って戦ったことを明確に示す証左として重要である。そして、黒田長政は明石掃部に自分の馬を譲ったのち、家臣の馬に乗ったことから、長政の家臣も馬に乗っていたと考えられる。

合戦の後、長政から家康に明石掃部の助命と長政の家臣として抱えることが許された（下線ｋ）。それから、明石掃部は大坂で宣教師と会っているので（下線ｌ）、この時に関ヶ原の戦いにおけるいろいろな状況を話したと推測され、その話をもとに上記の〔史料12〕の記載がされたと思われる。よって、その意味では〔史料12〕の記載内容の信憑性は高いと考えられる。

なお、上記の〔史料12〕には、家康方の軍勢に騎兵隊が存在したことは記されていないが、「1599～1601年、日本諸国記」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）には、関ヶ原での戦いにおける明石掃部の奮戦に関して「馬をなくしていたので、徒歩で闘いながら敵の騎兵隊に突撃し大いに前進した」（下線引用者）、（Ｉ－３、289頁）、「火縄銃の弾丸の雨の中を逃げ、かくも強力な騎兵隊の中に突撃し（後略）」（下線引用者）、（Ｉ－３、290頁）と記されていて、家康方の軍勢に騎兵隊が存在したとしている。この点については、この場合の騎兵隊というのは騎馬隊のことを指しているのか、他の合戦においても騎兵隊（或いは騎馬隊）の存在が広く確認できるのかどうか、ということも含めて、今後、検討していく必要がある。

おわりに

関ヶ原の戦いの対立軸について、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』ではどのように規定しているのかを検討したい。これまでの通説では、関ヶ原の戦いの対立軸について、家康ＶＳ石田三成という見解が主流であったが[30]『十六・七世紀イエズス会日本報告集』ではそのような規定はしていない[31]。

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』において、関ヶ原の戦いの対立軸について記載された箇所をまとめたものが表１である。表１を見るとわかるように、家康との対立軸は「諸奉行」（Ⅰ－３、253頁、Ⅰ－４、69、73頁、Ⅰ－５、16、17、71頁）、「九名からなる国家の奉行たち」（Ⅰ－３、306頁）、「日本国の奉行たち」（Ⅰ－３、330頁）、「奉行たち」（Ⅰ－４、31、124、167頁）、「奉行ら」（Ⅰ－３、212頁）、「太閤が残した奉行たち」（Ⅰ－４、107頁）と記されていて、いずれも複数形であり、石田三成という固有名詞は一切出てこない。この場合、複数形になっていることから、「奉行」は一人ではなく複数であることがわかるが、この「諸奉行」などという記載は具体的にだれを指すのかを検討する必要がある。

まず、上述した中で「九名からなる国家の奉行たち」（Ⅰ－３、306頁）とはだれなのか、という点であるが、そのあとの記載で「奉行の一人であった（上杉）景勝」（Ⅰ－３、306頁）としているので、上杉景勝＝「奉行」ということになり、五大老の一人である上杉景勝を「奉行」としているので、五大老についても「奉行」と記載していることがわかる。とすると、「九名からなる国家の奉行たち」とは、五大老・五奉行のうち家康以外の９名を指していることになる。

この対立軸は、上述した、家康ＶＳ反家康同盟の構図をそのまま踏襲したような形であるが、五大老の一人である前田利長、五奉行の一人である浅野長政は関ヶ原の戦いでは家康とは交戦状態になかったので、この２人は除外して考えるべきであろう。よって、正確には家康と対立したのは「九名からなる国家の奉行たち」ではなく、「七名からなる国家の奉行たち」（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝の三大老と石田三成、前田玄以、増田長盛、長束正家の四奉行）と訂正すべきである。この場合、三大老だけでなく、四奉行も家康との対立軸に含めている点は重要であり、三大老・四奉行を「国家の奉行たち」（下線引用者）としている点は（同様の記載として「日本国の奉行たち」〔下線引用者〕、〔Ⅰ－３、330頁〕という記載がある）、三大老・四奉行が秀頼を直接推戴して、「国家」権力である豊臣公儀の最高構成メンバーであることを示している。逆に言えば、家康は、「国家」権力である豊臣公儀と敵対したということになる。

また、表１からは、家康との対立軸として「（秀頼の）後見人のうちのほかの三名」（Ⅱ－２、197頁）、「他の三人の後見役」（Ⅱ－２、199頁）、「三人の競争相手」（Ⅱ－２、204頁）、「三人の奉行」（Ⅱ－２、206頁）、「他の三人の（秀頼の）後見人」（Ⅱ－２、215頁）という記載もあり、この場合、「三人」（或いは「三名」）という人数が具体的にわかる。この「三人」については、「（秀頼の）後見人のうちのほかの三名」（Ⅱ－２、197頁）、「他の三人の後見役」（Ⅱ－２、199頁）、「他の三人の（秀頼の）

後見人」（Ⅱ－２、215頁）という記載から、秀頼の後見人のうち、家康以外の３人ということになる。

秀吉が死去に先立って秀頼の後見役を指名したことについては、「1599年度日本年報」（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』）に「（引用者注：秀吉は）家康に主君（秀頼）の後見役と、日本国全土の統治を任せ、その同僚として四名の重立った家老を与えた。彼（引用者注：秀吉）はこうすることによって多くの者がこの栄誉に参画し、国家を統治する権力においては同等のようにして互いに平和を保つようにした。」（下線引用者）、（Ⅰ－３、119頁）と記載されている。この記載からは、家康が秀頼の後見役に秀吉から指名され、「四名の重立った家老」も「その同僚」としているので、同様に秀頼の後見役に秀吉から指名されたことになる。この家康と「四名の重立った家老」の合計５人は五大老を指すと考えられるが、五大老は「国家を統治する権力においては同等のようにして」としているので、秀吉の意図としては、五大老の権力を同等にしたのであり、家康だけが突出した権力の行使を秀吉から認められたのではなかった。その意味では、家康が恣意的な政治行動をおこなった場合は、他の大老が牽制したり、他の大老と対立する結果になるのは明白であった。

このように秀頼の後見役は五大老であることがわかるので、家康以外の大老は４人ということになるが、上述のように、家康との対立軸として「（秀頼の）後見人のうちのほかの三名」などという記載になっている理由を考えると次のようになる。五大老とは、徳川家康、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝、前田利長（父の利家は慶長４年閏３月に死去）の５人であり、関ヶ原の戦いの時点では、前田利長は家康とは交戦状態にはなかったので前田利長を除外すると、残りの家康以外の３人である毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝が「（秀頼の）後見人のうちのほかの三名」に該当することになる。

よって、関ヶ原の戦いに関して軍事的な意味での対立軸は、家康ＶＳ三大老（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）という大老間での武力闘争ということになる。そして、「今の日本の君主で公方となった内府（家康）に対する秀頼方からの攻撃という為政者間の戦さ」（下線引用者）、（Ⅱ－１、166頁）という記載があり、家康に対する「秀頼方からの攻撃」というように明記されている。このことは、豊臣公儀の側に立つ三大老（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）・四奉行（石田三成、前田玄以、増田長盛、長束正家）が直接、秀頼（＝秀吉の後継者）を推戴していることを示しており、逆に家康は秀頼を推戴しておらず、豊臣公儀である「秀頼方」に敵対する立場であったということになる。「為政者間の戦さ」という記載は、軍事的に見れば、大老間での権力闘争〔政治闘争〕（家康ＶＳ毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）が武力闘争〔軍事闘争〕（＝戦争）に発展した、ということを明確に示しており、関ヶ原の戦いの本質を考えるうえで重要である。

なお、三大老（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）の中で中心となって反家康の主導的役割を果たしたのは、毛利輝元であった。この点については、毛利輝元の大坂在城の状況について「城（引用者注：大坂城）には毛利（輝元）殿が住んでいた。彼（引用者注：毛利輝元）は当時、先に内府様（引用者注：家康）が就いていたのと同じ栄誉職にあって〔つまり公儀職の頭で、奉行頭のような役目を司っていた〕、内府様が戦争の勃発する前に住んでいたのと同じ邸（引用者注：大坂城西の丸）に滞在していた。」（Ⅰ－３、311頁）と記されていて、家康を公儀から放逐したあと、毛利

輝元が大老筆頭として大坂城西の丸に所在した、としていることから明確に理解できる。

以上のように考えると、関ヶ原の戦いにおける対立軸は、家康ＶＳ「国家」権力である豊臣公儀の最高構成メンバー（三大老・四奉行）であり、軍事闘争という点では、大規模な軍事動員が可能な大大名である大老間での戦争という性格が強かった、というように規定できる。ただし、関ヶ原の戦いの時点で家康が大老であったのか否かという点については、７月に秀頼を直接推戴した石田・毛利連合政権が成立し、家康を「政治から放逐」（Ｉ－３、242頁）し、「国家のすべての政務から閉め出して」（Ｉ－３、306頁）しまったので、関ヶ原の戦いの時点で家康が大老としての公的地位になかったことは明らかである。

関ヶ原の戦いにおける対立軸は、現在の通説では、家康ＶＳ石田三成という対立軸でとらえられているが、これは、当時家康が豊臣公儀から排除されていたことを糊塗するために、石田三成一人を悪役に仕立てあげて本来の対立軸を矮小化させようとした後世の徳川史観（徳川家〔江戸幕府〕による政治支配が歴史的に見て正統なものであるとする後付けの歴史観）の影響を受けたことによると考えられる。つまり、家康と実際に敵対したのは石田三成一人ではなく、「国家」権力である豊臣公儀そのものであった、ということが『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の記載内容から理解できる。

本稿で指摘したように、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』に記載された関ヶ原の戦いに至る政治過程や関ヶ原の戦いの実戦の状況については、日本側の史料に記載されていない事項もあるので、その点で貴重である(32)。

また、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』は、後世の江戸時代における徳川史観のバイアスがかかっていない点から客観的な記載内容であると見なすことができる。よって、今後は関ヶ原の戦いの実像を検討するうえで、本稿で指摘できた諸点についても考慮すべきであろう。

［註］

（１）　二木謙一『関ヶ原合戦－戦国のいちばん長い日』（中央公論社、1982年）、笠谷和比古『関ヶ原合戦－家康の戦略と幕藩体制－』（講談社、1994年）、同書は後に講談社学術文庫として2008年に再刊、笠谷和比古『関ヶ原合戦と近世の国制』（思文閣出版、2000年）、笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』（吉川弘文館、2007年）、小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（新人物往来社、1999年）、桐野作人『真説関ヶ原合戦』（学習研究社、2000年）、桐野作人『関ヶ原　島津退き口－敵中突破三〇〇里』（学研パブリッシング、2010年）、同書は後に加筆・修正して学研Ｍ文庫として2013年に再刊、光成準治『関ヶ原前夜－西軍大名たちの戦い』（日本放送出版協会、2009年）、拙著『新「関ヶ原合戦」論－定説を覆す史上最大の戦いの真実』（新人物往来社、2011年）、本多隆成『徳川家康と関ヶ原の戦い』（吉川弘文館、2013年）、小和田哲男『[図解]関ヶ原合戦まで90日―勝敗はすでに決まっていた！』（PHP研究所、2013年）、小和田哲男監修・

小和田泰径著『関ヶ原合戦公式本』（学研パブリッシング、2014年）、矢部健太郎『関ヶ原合戦と石田三成』（吉川弘文館、2014年）、谷口央編『関ヶ原合戦の深層』（高志書院、2014年）、公益財団法人福島県文化振興財団編『直江兼続と関ヶ原』（戎光祥出版、2014年）、渡邊大門『謎とき東北の関ヶ原―上杉景勝と伊達政宗』（光文社、2014年）、渡邊大門『こんなに面白いとは思わなかった！関ヶ原の戦い』（光文社、2015年）など。

（２）　拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』（宮帯出版社、2014年）では、関ヶ原合戦当日（９月15日）、小早川秀秋が開戦と同時に裏切り、石田三成方の軍勢は瞬時に敗北したことについて、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の該当の記載箇所を引用して検討した。

（３）　本稿で検討対象とした松田毅一監訳『十六･七世紀イエズス会日本報告集』（同朋舎出版）は、Ⅰ期１巻〈天正16～同20年〉（同朋舎出版、1987年）、Ⅰ期２巻〈文禄３～慶長元年〉（同朋舎出版、1987年）、Ⅰ期３巻〈慶長２～同５年〉（同朋舎出版、1988年）、Ⅰ期４巻〈慶長６～同９年〉（同朋舎出版、1988年）、Ⅱ期１巻〈慶長10～同18年〉（同朋舎出版、1990年）である。本稿において『十六･七世紀イエズス会日本報告集』から引用した場合は、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』の各巻について、例えば、Ⅰ期１巻であれば「Ⅰ－１」のように記載した。

（４）　谷徹也「秀吉死後の豊臣政権」（『日本史研究』617号、日本史研究会、2014年、14頁）では、この箇所の記載について「イチノカミを「市正」として片桐且元のことと推測しているが、「イキノカミ」すなわち毛利壱岐守の誤りであろう」と指摘されている。

（５）　寺沢広高について「奉行たち（引用者注：石田三成など）との成功した（ママ）（引用者注：勝利した、という意味か？）戦さ（引用者注:関ヶ原の戦い）では、内府様側（引用者注:家康側）に味方した」（Ⅰ－４、６頁）と記されている。

（６）　『史料綜覧』巻13（東京大学史料編纂所編纂、財団法人東京大学出版会発行、1982年覆刻、185頁）、前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（37～38頁）、前掲・小和田哲男『［図解］関ヶ原合戦までの90日－勝敗はすでに決まっていた！』（21、25頁）、前掲・小和田哲男監修・小和田泰経著『関ヶ原合戦公式本』（24～25頁）。

（７）　前掲『史料綜覧』巻13（191頁）。

（８）　前掲『史料綜覧』巻13（206頁）。ただし、前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（48～49頁）では９月27日説が提示されている。

（９）　前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（39～40頁）、前掲・小和田哲男『［図解］関ヶ原合戦までの90日－勝敗はすでに決まっていた！』（24～25頁）。

（10）　前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（39～40頁）、前掲・小和田哲男『［図解］関ヶ原合戦までの90日－勝敗はすでに決まっていた！』（24～25頁）。

（11）　前掲『史料綜覧』巻13（191頁）、前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（34頁）。

（12）　前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（39頁）。前掲・小和田哲男『［図解］関ヶ原合戦までの90日－勝敗はすでに決まっていた！』（24頁）。豊臣七将の具体的名前については、史料によって異同があ

る（前掲・小和田哲男監修・小和田泰経著『関ヶ原合戦公式本』、26頁）。豊臣七将による石田三成襲撃事件の専論としては、水野伍貴「前田利家の死と石田三成襲撃事件」（『政治経済史学』557号、日本政治経済史学研究所、2013年）がある。また、石畑匡基「増田長盛と豊臣の「公儀」－秀吉死後の権力闘争－」（前掲・谷口央編『関ヶ原合戦の深層』）においても、豊臣七将による石田三成襲撃事件について検討されている。

(13) 尾下成敏「上杉景勝の居所と行動」（藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』、思文閣出版、2011年、269頁）。

(14) 上杉討伐に関連して、その後の家康の動きについて「そこで内府様（引用者注：家康）は、（上杉）景勝との戦闘について、最良の命令を下した。すなわち、これと対抗するため、その一子（引用者注：結城秀康）を多数の兵とともに残し、自ら残りの全軍勢を率いて、配下の待つ尾張の国へ来着した。」（下線引用者）、（Ⅰ－３、253頁）と記されている。この記載では、家康が上杉討伐を中止して西上することについて、家康自身が「命令を下した」としていて、家康が諸将と協議したとは記されていない点（つまり、いわゆる小山評定に関する記載が一切ない点）は注目される。筆者（白峰）は、いわゆる小山評定については歴史的事実ではない、という立場であり（拙稿「フィクションとしての小山評定―家康神話創出の一事例―」、『別府大学大学院紀要』14号、別府大学大学院文学研究科、2012年、拙稿「小山評定は歴史的事実なのか（その１）―拙論に対する本多隆成氏の御批判に接して―」、『別府大学紀要』55号、別府大学会、2014年、拙稿「小山評定は歴史的事実なのか（その２）―拙論に対する本多隆成氏の御批判に接して―」、『別府大学大学院紀要』16号、別府大学会、2014年、拙稿「小山評定は歴史的事実なのか（その３）―拙論に対する本多隆成氏の御批判に接して―」、『史学論叢』44号、別府大学史学研究会、2014年）、この記載については、小山評定が歴史的事実ではないということを示す傍証になるであろう。

(15) 前田利長と家康の対立については、「こうしてこの（一）六〇〇年を通じて（引用者注：家康は）統治するに至った。このような時に、彼（引用者注：家康）と（前田）肥前（利長）殿との間に伝言による激しい応酬があり、果ては断交に立ち至るかに思われた。しかし、内府様は、とどのつまり、先の陰謀（引用者注：反家康の陰謀）に加担していたといわれるその他の諸侯とまず和を講じ、その多くと姻戚関係を結び、最終的には肥前殿とも関係を修復した。もっともその和平たるや双方の側にとって真実のものというよりは一時の間に合わせにすぎなかったようである。」（Ⅰ－３、241頁）と記されている。この記載における「伝言による激しい応酬」とは書状のやり取りによる非難の応酬という意味と考えられ、家康と前田利長の間でそうした対立があったが、最終的には関係が修復された、としている。しかし、この関係修復は「一時の間に合わせ」にすぎなかった、としているので、その後も家康と前田利長の対立が再燃する可能性はあったと思われる。なお、関ヶ原の戦い以後の1601年、1602年の時点で、前田利長については、「彼（引用者注：前田利長）は日本でもっとも勢力のある領主の一人であり、日本中にたいそう信望が厚いので、内府様（引用者注：家康）が亡くなれば、彼が天下（テンカ）においてその跡を容易に継ぐことができると多くの人が推測している」（Ⅰ－４、168頁）と記されているので、前田利長は家康死去後に天下支配が出来得る人物として衆目の認めるところであったことがわかる。

(16) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、1980年、66頁、「ブリャク（武略）」の項）。

なお、室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典』〈室町時代編４〉（三省堂、2000年、1033頁、「武略」の項）には、「武略」の意味として「勝利をかちとるべくさまざまにめぐらす、軍事上の策謀」と記されている。

(17)　相田文三「徳川家康の居所と行動（天正10年６月以降）」（前掲・藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』、117頁）。

(18)　相田文三「浅野長政の居所と行動」（前掲・藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』、328頁）。

(19)　「放逐」とは追放という意味である（『日本国語大辞典（第二版）』11巻、小学館、2001年、1446頁、「放逐」の項）。

(20)　相田文三「徳川家康の居所と行動（天正10年６月以降）」（前掲・藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』、118頁）。

(21)　『日本国語大辞典（第二版）』13巻、小学館、2002年、507頁、「幼君」の項）。この場合、「幼君」とは訳者による訳語であるので、その点を一定程度考慮したうえで、その意味を検討していることを御理解いただきたい。

(22)　『日本国語大辞典（第二版）』13巻、小学館、2002年、1239頁、「若君」の項）。この場合、「若君」とは訳者による訳語であるので、その点を一定程度考慮したうえで、その意味を検討していることを御理解いただきたい。

(23)　米山一政編『真田家文書』上巻（長野市、1981年発行、2005年改訂、56号文書）。

(24)　前掲・米山一政編『真田家文書』上巻（56号文書）。

(25)　前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』（148 ～ 149頁）。

(26)　この記載からは、毛利家だけで４万人を動員した、ということになる。上述した石田三成の人数書立て（前掲・米山一政編『真田家文書』上巻〔56号文書〕）では毛利輝元は４万1500人動員したことになっており、数字的にほぼ一致する。前掲・米山一政編『真田家文書』上巻、56号文書の内容を作表したものについては、前掲・拙著『新「関ヶ原合戦」論－定説を覆す史上最大の戦いの真実』（158 ～ 160頁）の「表２　石田・毛利連合軍の諸将と動員人数（慶長５年８月５日頃の時点）」を参照。

(27)　石田・毛利連合政権については、拙稿「慶長５年７月～同年９月における石田・毛利連合政権の形成について」（『別府大学紀要』52号、別府大学会、2011年）、前掲・拙著『新「関ヶ原合戦」論－定説を覆す史上最大の戦いの真実』（91 ～ 115頁）の「第３章　石田・毛利連合政権の成立」を参照。

(28)　小西行長については、「戦争で敗北した同盟軍（引用者注：反家康同盟軍）の主将格であった」（Ⅰ－４、８頁）、「敵軍の大将」（Ⅰ－４、73頁）と記されている。

(29)　宇喜多秀家の従兄弟とする記載もあるが（Ⅰ－４、31頁）、これは甥の間違いであると思われる。

(30)　前掲・笠谷和比古『関ヶ原合戦－家康の戦略と幕藩体制－』、前掲・笠谷和比古『関ヶ原合戦と大坂の陣』、前掲・小和田哲男『関ヶ原から大坂の陣へ』など。

(31)　『十六・七世紀イエズス会日本報告集』では、日本語訳の際に訳者（田所清克氏、住田育法氏、東光博英氏共訳）が「奉行（石田三成）ら」（Ⅰ－３、212頁）というように（　　）内の補注に（石田三成）

と入れて、奉行＝石田三成と解釈しているが、奉行は石田三成だけを指すのではないので、この点は再検討が必要である。

(32)　そのほか、関ヶ原の戦いに関連して、慶長５年の九州における黒田如水の動向については、「（黒田）シメアン（如水孝高）の息子甲斐守（長政）は内府様の側についた。国主（黒田）シメアンはそのことに非常に驚き、いかに処すべきか躊躇した。なぜなら、もし彼（引用者注：黒田如水）が奉行らに味方すれば、彼が治めていた領国（引用者注：豊前国中津）の（主である）我が子と対決することになり、またもし奉行らと対峙すれば、領国が破壊の危険に曝されるからであった。（中略）結局、彼は内府様に味方することを決め、人員を集めて領国の幾つかの地域を強化し始めた。」（下線引用者）、（Ⅰ－３、212頁）と記載されている。この記載からは、①黒田如水は息子の長政が家康に味方した時点では、石田・毛利方につくのか、或いは、家康方につくのか決めていなかった、②そのため、長政が家康に味方したことに非常に驚き、如水自身はいかに対応すべきか決められなかった、③その理由は、如水が石田・毛利方に味方すれば、息子の長政と対戦することになり、家康方に味方すれば領国が危険になるからであった、④その後、ついに如水は家康方に味方することに決めた、ということがわかる。つまり、黒田如水は当初はどちらにつくのか決めておらず、長政が家康方についた時点で非常に驚いて、どちらにつくか即決できず、一定のタイムラグがあったのちに家康方につくことになった、という経過がわかる。このことは、如水が早くから家康に味方したとする通説とは異なっているが、如水が熱心なキリシタン大名であった点を考慮すると、この宣教師側の史料内容は信憑性が高いと思われる。前掲・拙著『新「関ヶ原合戦」論－定説を覆す史上最大の戦いの真実』（99～100頁）において、「８月１日付吉川広家宛黒田如水書状」（『大日本古文書』〈吉川家文書之２〉、東京帝国大学編纂・発行、1926年、950号文書）の内容分析から、如水は８月１日の時点では、石田・毛利方につくのか家康方につくのかいまだその去就を決していなかった、と指摘したが、『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における如水の動向に関するこの記載は、前掲・拙著『新「関ヶ原合戦」論－定説を覆す史上最大の戦いの真実』での指摘を裏付けるものと言えよう。

黒田如水が九州で軍事行動をおこなった際、居城の中津城を出陣した時の軍勢について、『黒田家譜』では、黒田長政が上杉討伐のため東国へ発向して黒田家の家臣を数多く召し連れたので、中津に残った家臣数が少なかったため、黒田如水が急遽、金銀を与えて貴賤を選ばず募兵して3600余人を召し抱えた、としている（貝原益軒編著『黒田家譜』、歴史図書社、1980年、334頁）。しかし、実際には、黒田長政が上杉討伐のために出陣した際の兵力数は1300であり（前掲・拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』、115頁）、それ程多かったわけではないので、中津には多くの黒田家家臣が残っていたことになる。『十六・七世紀イエズス会日本報告集』では、黒田如水は「日本の慣例に従って領国を息子甲斐守（長政）殿に譲った後も、（中略）（引用者注：長政の）不在中は領国を治めていた」（Ⅰ－３、209頁）のであり、「豊前の国に八千の軍勢を有したので（中略）その軍勢を内府様（引用者注：家康）の敵たちがいた豊後の国の方へ率いて行った」（Ⅰ－３、308頁）と記載されている。つまり、黒田如水は長政に領国を譲ったあとも、長政の不在時には、依然として豊前の「国主」（Ⅰ－３、308頁）

であり、如水が出陣した際の8000の兵力は黒田家の家臣であったことになる。よって、上述のように、如水が金銀で急遽募兵したという話は虚偽であることがわかり、こうした話が創作された背景としては、『黒田家譜』編纂の過程で如水の超人的能力（如水の才覚でまたたく間に兵力を集めて勝利したという架空の話）をでっちあげて如水の英雄伝説をつくろうとした意図があったと推測できる。なお、黒田如水が国許（中津）において、多くの軍勢を有していたことは、「（慶長５年）８月25日付黒田長政宛井伊直政書状」（『黒田家文書』１巻〈本編〉、福岡市博物館編纂・発行、1999年、30号文書）に「今度於御国本ニ、別而御精ニ被入、殊御人数数多御抱被成」と記されていることからも確認できる。

また、石垣原の戦いで黒田如水と対戦した大友義統の動向については「奉行たちは同じ豊後の国へ、かつての豊後の国主（大友）フランシスコ（宗麟）の息子（吉統）〔彼は二、三年の間、太閤様の命令によって都（ミヤコ）に引き留められていた〕を遣わし、その領国の正統の国主として、その家来たちとともにいっそう容易に（黒田）官兵衛殿の攻撃を撃退させようとした。この新しい豊後の国主（引用者注：大友義統）は、四千の軍勢を率いて豊後へ到着するやいなや（黒田）官兵衛殿の侵攻を知らされ、引き続いて合戦（引用者注：石垣原の戦い）となった。」（下線引用者）、（Ｉ－３、308～309頁）と記載されている。この記載からは、大友義統は「奉行たち」すなわち豊臣公儀から豊後国に遣わされた「正統の国主」であり「新しい豊後の国主」であったことがわかる。この記載内容からは、大友義統は正式に豊臣公儀から「新しい豊後の国主」に任じられたということになり、その意味では、大友義統が旧領を回復するために豊後国へ来て挙兵したとする通説の説明は誤りであることがわかる。なお、この点については、前掲・拙著『新「関ヶ原合戦」論－定説を覆す史上最大の戦いの真実』（106～109頁）において、「７月晦日付斎藤利宗宛松井康之・有吉立行連署状」（『松井文庫所蔵古文書調査報告書』２、八代市立博物館未来の森ミュージアム、1997年、422号文書）、「８月28日付松井康之・有吉立行宛加藤清正書状」（図録『松井家三代－文武に生きた人々』、八代市立博物館未来の森ミュージアム、1995年、148頁）などの内容検討をもとに同様の指摘をおこなった。そのほか、通説では、豊後国へ下った大友義統は、急遽、旧家臣を集めて挙兵した、と説明されることが多いが、上記のように「四千の軍勢を率いて豊後へ到着するやいなや」と記されているので、大友義統はすでに豊後国へ来た時点で4000の軍勢を率いていたことがわかる。この4000の軍勢は、豊臣公儀から豊後下国に際して大友義統に付けられた軍勢であると思われる。

表1

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』における関ヶ原の戦いの対立軸についての記載箇所のまとめ

この頃、都では内府様（家康）と奉行らの間で造反や戦さが生じた	Ⅰ－3	212頁
内府様（家康）と諸奉行両軍間の野戦	Ⅰ－3	253頁
日本全土は二軍に分かれた内戦によって燃え上がったが、その一方は九名からなる国家の奉行たちが指揮し、他に大勢の諸侯がいた。もう一方の軍勢の大将は内府様（家康）であったが、彼は己が領国である関東に留まって、奉行の一人であった（上杉）景勝と戦さをしていた。	Ⅰ－3	306頁
内府様（家康）は、日本国の奉行たちに対する光栄ある勝利が（後略）	Ⅰ－3	330頁
内府様（家康）が奉行たちの軍勢（に対して）首尾よく行なった合戦	Ⅰ－4	31頁
奉行側に対する戦さ	Ⅰ－4	61頁
内府様（家康）が諸奉行の軍勢と戦って得た、あの大勝利	Ⅰ－4	69頁
内府様（家康）は諸奉行と交えた先の戦さの折に（後略）	Ⅰ－4	73頁
太閤が残した奉行たちと、現在の統治者内府様（家康）との間におよそ二年前にあった先の戦さ	Ⅰ－4	107頁
内府様（家康）の（ママ）（とヵ）奉行たちの間にあった戦さ	Ⅰ－4	124頁
奉行たちとの戦さ	Ⅰ－4	167頁
（家康に対する）諸奉行の戦さ	Ⅰ－5	16頁
現在の公方（家康）に対する諸奉行の戦さ	Ⅰ－5	17頁
（家康に対する）諸奉行の戦さ	Ⅰ－5	71頁
今の日本の君主で公方となった内府（家康）に対する秀頼方からの攻撃という為政者間の戦さ	Ⅱ－1	166頁
太閤（秀吉）の命によりその息子秀頼に付された自分（家康）を含む（秀頼の）後見人のうちのほかの三名（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）を打ち負かした例の戦さ	Ⅱ－2	197頁
（次のように家康は）言った。「秀頼自身の扇動により他の三人の後見役（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）が彼（家康）の命をねらって陰謀を企てたのであり、（中略）」と。	Ⅱ－2	199頁
三人の競争相手（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）を易々と服従させ、天下の戦さで日本全国、すなわち三十六カ国（ママ）（六十六カ国ヵ）を掌中に収めた（中略）人物（家康）	Ⅱ－2	204頁

内府（家康）との戦さで敗れた三人の奉行（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）	Ⅱ－２	206頁
内府（家康）が他の三人の（秀頼の）後見人（毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝）を倒して勝利者となり、日本全国を己の掌中に収めるのを（秀頼が）目の当たりにして（後略）	Ⅱ－２	215頁
内府（家康）が（日本の）主権者の地位を争うためにおこなった他の二回（ママ）（一回ヵ）の戦さ	Ⅱ－２	216頁
内府（家康）に対する第一回目（ママ）（一回目ヵ）の戦さ	Ⅱ－２	263頁

【凡例】

表１における、Ⅰ－３、Ⅰ－４、Ⅰ－５、Ⅱ－１、Ⅱ－２の各略称は以下のようになる。

Ⅰ－３…松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅰ期３巻〈慶長２～同５年〉（同朋舎出版、1988年）

Ⅰ－４…松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅰ期４巻〈慶長６～同９年〉（同朋舎出版、1988年）

Ⅰ－５…松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅰ期５巻〈慶長10～同12年〉（同朋舎出版、1988年）

Ⅱ－１…松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅱ期１巻〈慶長10～同18年〉（同朋舎出版、1990年）

Ⅱ－２…松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』Ⅱ期２巻〈慶長18～元和４年〉（同朋舎出版、1996年）

※表１の文中における網掛けは、表１の作成にあたり対立軸をわかりやすく理解するため、筆者（白峰）がつけたものである。

※『十六・七世紀イエズス会日本報告集』では訳者が日本語訳の際に補足した注記が（　　）内に記されているが、表１において『十六・七世紀イエズス会日本報告集』から文章を引用する場合は、その訳者の注記を省略して引用し、文脈上必要な場合は、筆者（白峰）が（　　）として、独自に意味を補足した。